

博士号請求論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 松井一馬

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 巽 孝之  
文学研究科委員、Ph.D.

副査 神戸女学院大学名誉教授 別府恵子 Ph.D.

副査 京都大学大学院教授 水野尚之

副査 カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (University of California, Los Angeles) 教授 マーク・セルツァー (Mark Seltzer) Ph.D.

論文題目

“The Spectacle of the Empire: Haunting Figures in Henry James’s Later Works” (帝国の視者：ヘンリー・ジェイムズ後期作品における他者表象)

松井一馬君の本論文はリアリズム作家ヘンリー・ジェイムズの主に後期作品に登場する幽霊に着目し、その表象に帝国主義的な言説の揺らぎと、新たなる帝国として領土獲得競争へと邁進していきつつあった19世紀末のアメリカへの危惧を読み取ることを目的とする。ジェイムズ作品における(異)人種性の表出や作家自身のオリエンタリズム的政治性への指摘はこれまでもなされてきたが、そうした観点を国際性や主体の確立といったジェイムズ作品の中心と目されてきた主題と関連付けた論考はほとんどない。本論は同時代の帝国主義的国際状況がジェイムズ作品における視点人物の主体意識の動揺に反映されていることを確認し、同時にそこに十九世紀末アメリカの国家的主体意識の動揺をもアレゴリカルに見出すことで、従来のジェイムズ研究に新たな地平を提供することを企図した野心的かつ独創性にあふれる論文である。

Acknowledgments

Chronology

Introduction:

Chapter 1: When You Find a Ghost: *The Sacred Fount* as an Intersubjective Text

Chapter 2: A Guide to the Other World: The Way of Seeing in Henry James’s Supernatural Tales

Chapter 3: The Empire of Henry James: Revolving “The Turn of the Screw”

Chapter 4: The Ghost of Empire / The Empire of Ghost: “The Jolly Corner” as Imperial Gothic

Chapter 5: A Lady, a Text, a Nation: Dual Allegory in *The Portrait of a Lady*

Conclusion:

Bibliography

## 論文の要旨

本論はヘンリー・ジェイムズの主に後期作品に登場する幽霊に着目し、その表象に帝国主義的な言説の揺らぎと、新たなる帝国として領土獲得競争へと邁進していきつつあった19世紀末のアメリカへの危惧を読み取ることを主たる目的としている。ジェイムズ作品における（異）人種の表象や作家自身のオリエンタリズム的政治意識の指摘はこれまでもなされてきたが、そうした観点を国際性や主体の確立といったジェイムズ作品の中心と目されてきた主題と関連付けた論考はほとんどない。本論は同時代の帝国主義的国際状況がジェイムズ作品における視点人物の主体意識の動揺にまで反映していることを確認し、同時にそこに19世紀末アメリカの国家的主体意識の動揺をも見出すことで、従来のジェイムズ研究に新たな地平を切り拓くことを企図するものである。

序章ではジェイムズ作品において幽霊の果たす役割が概観される。19世紀末の心霊主義の隆盛は帝国主義的政治体制の動揺と軌を一にしており、超自然的存在として見る者に自然界の秩序の揺らぎを示す幽霊という存在は必然的に政治性を帯びるものであった。と同時に、芸術家の営為を知覚活動の延長ととらえていたジェイムズにとって、見る者を見返すことで「見る／見られる」という関係を覆す幽霊は、視点人物の主観的世界認識に疑義を呈する存在でもある。すなわち、ジェイムズ作品において幽霊は視線による「主体／客体」という認識論的権力関係を覆し、見る者の主体を動揺させることにより、同時代の帝国主義的状況の揺らぎを反映しているのである。

第一章ではジェイムズ作品において見る者がその主観的世界に及ぼす権力と他の主体の視線によるその無効化が論じられる。“The Author of ‘Beltraffio’” (1884)において典型的なように、ジェイムズ作品における視線の権力は一人称の語り手に最も顕著に表れ、その独善性がしばしば悲劇をもたらすが、そうした主観的視線の見誤りを滑稽なまでに描くのが長編小説 *The Sacred Fount* (1901) である。この作品における一人称の語り手はテキスト内の作者(author)としてその作品たる主観的世界に権威(authority)を振るうが、自らも他者の視線の対象であることに気付いたとき、その独善的世界認識は徹底的に否定され、視線の交錯による相対化、すなわち間主観的な世界認識の導入が促されていく。

第二章ではジェイムズ作品における幽霊の性質が検討される。幽霊は意志疎通および理解の不可能な存在でありながら、常に見る者と相似した部分を持ち

合わせた第二の自己（alter ego）として登場する。見る者に他の主体、異なる世界認識の存在を暗示し間主観的な世界認識を獲得することを促すこうした幽霊の他者性が認識論的であるばかりでなく文化的でもあることを考えれば、彼らは見る者を異文化へ導く一種のガイドであり、アメリカとヨーロッパという異なる文化間の軋轢を描いた国際テーマの作品にも同質の存在を見出せる。その典型として長編小説 *The Ambassadors* (1903)の登場人物が分析される。

第三章では幽霊の文化的他者性を例証するにのち中編小説“*The Turn of the Screw*” (1898)が対象となる。この作品では、帝國的ヒエラルキーに基づいた植民地になぞらえられる館に幽霊が出現する。一種の総督(the governor)としてこの植民地を堅持する役割を負った語り手の女性家庭教師(the governess)にとって、彼らは階級秩序を乱す存在であり、事実彼らとの交流が子供たちの「革命」を誘発する。こうした幽霊の境界侵犯性には、本質的に他者でありながら帝国に内在する植民地的他者としての性質を読み取ることができる。

第四章では短編小説“*The Jolly Corner*” (1916)を取り上げ、文字通りオルター・エゴとして登場するこの作品の幽霊に帝國的秩序の動揺だけでなく、新たな帝国として台頭しつつあったアメリカが抱える不安をも見出していく。狩りの様相を呈する主人公ブライドンのオルター・エゴ追跡において、追う者と追われる者の立場が反転する恐怖を描くこの作品は、植民地において主人公が非西洋的存在に脅かされるというプロットを持つ点で Patrick Brantlinger の命名する「インペリアル・ゴシック」に区分可能であり、帝国支配のヘゲモニーの弱まりと文明が野蛮に転換する恐怖とを投影している。と同時に、ブライドンにはセオドア・ローズヴェルト大統領が投影され、帝国主義的領土拡張に邁進するアメリカを待ち受ける未来をも予見するものだ。

第五章では建国の理想と矛盾する帝国主義に浸食されるポストコロニアリズム国家アメリカへのジェームズの危惧を長編小説 *The Portrait of the Lady* (1881)に読み取る。登場人物たちに書物のメタファーが割り当てられたこの作品は、作者—テキスト—読者という関係を作品内で反復させ、作者の権威を否認し読者の関与によって完成される、テキストの成立をめぐるアレゴリーとして読むことができる。と同時に、アメリカを象徴する様々な性質が各キャラクターに割り振られ、イザベルが象徴する自由と独立という建国の理想が帝国主義によって書き換えられていく様をもアレゴリカルに描き出しているからには、19世紀末のアメリカが進む道筋へのジェームズの暗澹たる思いをも透視出来る

ことを、松井君は力強く論証する。

21世紀を迎えた今日、オリエンタリズム的視線はむしろその視線の対象であった非西洋において反復再生産され、帝国主義的言説は以前よりも力を増している。ジェイムズが描いたポストコロニアリズム帝国のアレゴリーは、今日ではもはやアメリカだけの問題ではない。帝国の亡霊への不安は世界中に共通している。ジェイムズを読むこと、特にその帝国主義的表象を読むことの重要性、そして今日性が、まさにこの点にあるのを示すのが、松井論文の主眼である。

## 審査の概要

松井一馬君の博士号請求論文の口頭試問については、**2014年9月16日(火曜日)夕方5時**より北館会議室2において行なわれた。日本を代表するヘンリー・ジェイムズ学者である神戸女学院大学名誉教授・別府恵子、京都大学教授・水野尚之に加え、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のマーク・セルツァーも来日し、すべての外部審査員が揃った口頭試問は、論文の主題から細部にまでわたり包括的なものとなり、約**2時間**が費やされた。

夏目漱石にも影響を与えたヘンリー・ジェイムズという作家は英米文学史においてはリアリズム文学の典型として、すでに評価が定まっている。旧来の研究も、彼の小説を認識論小説、芸術家小説、国際小説と分類することで確立している。だが、英語圏文学と帝国主義の関わりは、これまでロバート・ルイス・スティーヴンスンやラドヤード・キプリング、ジョゼフ・コンラッドといった作家たちが目に見えるかたちで表象してきたものであって、ヘンリー・ジェイムズは一見したところ、そうした問題系とはまったく無縁と映る作家であった。にもかかわらず、幽霊をめぐるジェイムズの修辞学を綿密に検証して行くと、以上の作家たちとも共通する帝国主義への意識と政治的な文脈があぶりだされるというのが、これまでのジェイムズ研究ではほとんどかえりみられなかったにもかかわらず説得力充分に迫って来る松井論文最大の独創性であることは、審査員全員の共通見解である。とりわけ本論文第三章に置かれた **"The Turn of the Screw"**論は、**2010年**に日本アメリカ文学学会に投稿され、厳密な査読を経て機関誌『アメリカ文学研究』第**47号**に掲載されるや、高い評価を得るに至ったが、今回の博士号請求論文はこの時の独創的知見を質量ともに拡大させたものであることも、確認された。

そして議論は、かつてガリレオの時代に望遠鏡が外宇宙の星々へ認識の範囲を拡大したのとまったく同時に、まさにその認識の革命が「外部の対象を見ること」のみならず「見ることそのものが考察対象となりうること」という自己言及的論理をも形成したところから説き起こされ、松井論文を彩る主観性、客観性、間主観性、そして凝視といった諸概念の妥当性が吟味された。幽霊といえばふつう、その超自然的性格からあらかじめ超俗的な先入観を与えるものの、じっさいのところ、モダニスト作家ヴァージニア・ウルフも指摘するごとく「ジェイムズの幽霊にはたえずいささか世俗的なところがある」のはたしかであり、それを承けて松井君が「幽霊とはそれを見る者自身の投影であり、現実世界と決して無縁ではないからだ」とする前提とその論証は手堅い。また、ジェイムの超自然小説全般を概観する第一章、フッサール現象学の理論を導入して展開する第二章については、旧来の認識論的研究をさらに深めるものになっているところも、伝統的なジェイムズ研究の文脈においても違和感がない。先行研究にはくまなく目配りし、手法的にはむしろ伝統的ともいえるテキストの精読（close reading）を貫いている点も、審査委員会に好印象を与えたゆえんである。

しかし、第三章に入り、前掲**"The Turn of the Screw"**をテキストに幽霊小説と帝国主義の共振を克明に分析するところから、この論文は伝統的な研究から徐々に離陸し始めて行く。旧来、謎とされてきた子供たち—— **Miles**および **Flora**——による反抗と幽霊の関わりを解明するのに、先行研究は認識論的分析や精神分析的解釈を優先させてきたが、それにひきかえ松井論文はこの女家庭教師 **Governess**がいわば植民地総督 **governor**であったのではないか、子供たちの反抗は革命だったのではないかと読む圧倒的に新しい視点を提供する。今日、**"governor"**という単語はアメリカ大統領の前段階ともいわれる州知事を指すのが一般的だが、17世紀ピューリタン植民地時代にはまぎれもなく植民地総督を意味したからである。一足先にアングリカンが建設していたヴァージニア植民地がもともとヴァージニア会社の事業展開をもくろんでおり、いわゆるピューリタンの巡礼の父祖たち（ピルグリム・ファーザーズ）もプリマス植民地建設にあたってはヴァージニア会社から法的基礎を与えられていることにかんがみるなら、ピューリタンの総督は社長のニュアンスが強く、彼を支える参事（assistant）たちから成る「総会議」（**court of assistants**ないし **the governor's council**）は株主総会に近い。やがて参事の枠は五名に増え、彼らは総督に助言するとともに植民地統治上の重要事項に関する投票権を行使するようになる

が、まさにそこから世界初の民主主義国家の基礎が準備され、独立革命へなだれ込んだことを考慮するならば、この一編の幽霊物語には最も凝縮したかたちのアメリカ史が寓喩化されている可能性を、松井論文は雄弁に説く。

第四章にもジェイムズ最後の幽霊小説である“*The Jolly Corner*”における二重自我のうちに帝国が植地的他者によって脅かされて行く過程と時の大統領シオドア・ローズヴェルトの影を読み込むという洞察も興味深かったが、何と云っても審査委員会が感銘を受けたのは最終章第五章の扱うジェイムズの代表的長編 *The Portrait of a Lady* のうちに、テキストを読むことのアレゴリーばかりでなく女性主人公イザベラの帝国主義的欲望をめぐるアレゴリーをも喝破し、両者の絶妙な連動を分析してみせたところであった。

もうひとつ、審査委員会が着目したのは、第二章で言及されるように、ジェイムズにおける幽霊というのが幽霊小説ジャンルだけに限定されるものではない、という前提である。一見したところ幽霊小説と映らない作品にも幽霊はひしめいているのだ。たとえば長編小説 *The Ambassadors* の主人公ストレザーはとある使命でアメリカからフランスに渡って来ているが、彼とその友人である辣腕弁護士ウェイマーシュは華やかなマリア・ゴストリー夫人と頻繁に出会うものの、その他の特に女性たちには彼女は見えない／会えない存在でしかない。その点に着目した松井君はゴストリー夫人（**Miss Gostrey**）を幽霊の寓喩（**Miss Ghostly**）と読み、議論をジェイムズ作品一般へと一気に開いて行く。

とはいえ、まさにそうした長所そのものが短所に転じる可能性も、審査委員会は見落とさなかった。幽霊物語以外にも幽霊が発見できるのであれば、もう少し多くの事例を挙げる必要があるのではないか。さらに、結論部では第五章との関連で黒船来航に伴う日本開国にまで議論が拡大しており、それはそれでまたもう一冊になりうる大部な論考を必要とするため、学位論文の結論としてはふさわしくないのではないか、という批判も投げかけられた。また、ここまでメタレベルにおける読みを展開するなら、従来指摘されてきたジェイムズの「信頼しえない語り手」（**unreliable narrator**）や「伏在する読み手」（**implied reader**）をめぐるはどのような批判的再検討が可能なのかを展開してほしいという要請も行なわれた。しかし、全般にこの論文が従来のヘンリー・ジェイムズ研究の方法論においては見られなかった斬新な批評的地平を開拓しており、著者が以後の国内外におけるアメリカ文学研究全般へ大いに貢献することは間違いないと確信した審査委員会は、ここに松井一馬君の論文が博士（文学）の学位に充分価するものと判断した次第である。

2014年12月22日